第10課　約束の子

【暗唱聖句】

「このように、神は御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、かたくなにしたいと思う者をかたくなにされるのです」ローマ9:18

【今週のテーマ】

神様はある働きのために自らがその人を主の器として選ばれます。

【日曜日・パウロの重荷】

「あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である」出エジプト19:6

なぜ、神様はイスラエルの民が選ばれたのかというと、彼らを通してご自分の栄光を表すためでした。そして、イスラエル人の模範的な態度を通して他の人々をご自分のもとへ引き寄せようとなさいました。これは今日のわたしたちクリスチャンにとっても同じことがいえるでしょう。しかし、イスラエルの民は選民意識だけが強くなり、神様の意図していたのものとは違う方向に進んでしまっていました。

「その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。それは、自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした」ローマ9:11 -12

神様によって選ばれたイスラエルの民が、神様の御心からそれてしまうようなことがあっても、神様のご計画はストップしてしまうのではありませんでした。多くの者たちが神様から離れてしまうような状況にあっても、必ずその中に残りの民と呼ばれる忠実な者たちがいました。彼らは神様から選ばれて者たちです。たとえわずかな人数だったのしても、彼らを通して神様のご計画は進められていくのでした。これはアブラハムからヤコブがイスラエルと呼ばれるようになるまでの歴史を振り返ってもわかります。すなわち、神様はアブラハムのすべての子孫ではなくイサクの子孫だけが契約の対象となり、イサクのすべての子孫ではなくヤコブの子孫だけを神様が選ばれました。この点についてパウロは単に「肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです」（ローマ9:8）と言っています。

【月曜日・選び】

「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです」ローマ9:13

神様はまだエサウとヤコブが生まれる前から長男のエサウではなく弟のヤコブを選び、特別な使命を果たすために選ばれました。この聖句は神様の愛は不公平で偏りがあるかのように表現されていますが、前後を読めばそういうことではなく、神様がエサウではなくヤコブをご自分の使命を果たすために選ばれたのだということについて語っていることがわかります。そして、次のようにパウロは続けます。

「神はモーセに、「わたしは自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ」と言っておられます。 従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです」ローマ9:15，16

神様からの召しを受けるということは神様の憐れみであり、また慈しみです。そして、これは人間がどれだけ努力したところで得られるものではなく、ただ神様の自由の選びによる憐れみによります。しかし、最終的にはエサウが長男としての特権を失うきっかけとなったのは自らそれを放棄したからでした。神様の選択はすべてに先立つものですが、わたしたち一人ひとりにも自由の選択が許されており、これが後々大きな影響を持つことが少なくないことを肝に銘じておく必要があります。

【火曜日・不可解なこと】

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。天が地を高く超えているように、わたしの道はあなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている」イザヤ55:8、9

神様の選び、神様の御心によって世界は動いており、神様の目的は遂行されています。このことを心から信じ、委ねて生きるのがクリスチャンですが、時にそれはわたしたちの思いや願いと異なっているために、理解ができなくなったり、苦しくなったり、不安に襲われたりします。それでもわたしたちは信じ続けていくことが求められているのです。

「わたしたちにとって益となるかぎり、神の目的を知ることができますが、それ以上は全能者の御手と愛のみ心に一任しなければならない」キリストへの道より

「聖書にはファラオについて、「わたしがあなたを立てたのは、あなたによってわたしの力を現し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と書いてあります」ローマ9:17

パウロは出エジプトのときのファラオを取り上げていますが、彼は大敗北をきっすることで、結果的に神様の偉大さを他の国々まで広めることになりました。これすら神様の計画であり、この計画を遂行するためにその時のファラオを選んだのは神様だったのだとまでパウロは言うのです。ちなみに、ファラオの心を神様がかたくなにしたために、すぐにイスラエルの民はエジプトを脱出できず、10の災いのただなかに巻き込まれていくことになりましたが、それによって神様は逆らうことができない圧倒的な存在であることを、実はエジプト人だけでなく、イスラエル人たちも知ることになるのでした。400年にわかった奴隷状態であった彼らの信仰をすっかり弱くなっていたために、もう一度リバイバルを起こす必要があったのです。

【水曜日・「アミン」すなわち「わたしの民」】

「ホセアの書にも、次のように述べられています。「わたしは、自分の民でない者をわたしの民と呼び、／愛されなかった者を愛された者と呼ぶ」ローマ9:25

パウロはローマ9:25においてホセア書2:25から引用しています。そこには実際次のように書かれてあります。

「わたしは彼女を地に蒔き、ロ・ルハマ（憐れまれぬ者）を憐れみ、ロ・アンミ（わが民でない者）に向かって「あなたはアンミ（わが民）」と言う。彼は、「わが神よ」とこたえる」ホセア2:25

これは異邦人が神様から神様の子として受け入れられているということはもちろん、主の働きの器としても異邦人を用いられるであろうことも表しています。ところで、ホセア書が書かれた背景は、神様と神様に背き偶像の神を拝むイスラエルがありました。イスラエルと神様との関係を示すために、ホセアに主は遊女と結婚するように言われます。そして生まれた子どもに「神は拒絶する」という意味合いの名前やわが民でない者という名前を付けさせます。

神様に背を向けて偶像を拝むイスラエルの民たちに対して、神様はどれほど心を痛められていたことでしょう。しかし、それでもなお彼らを憐れみ、我が民よと言われるときが来るとホセアは預言しました。どれほど親不孝な子どもであっても、親にとってはいつまでも我が子であるように、神様にとってわたしたち一人ひとりがどれほど罪深くても大切な子どもなのです。

【木曜日・つまずき】

「では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。9:31 しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした」ローマ9:30，31

求めていないのに与えられ、求めているのに与えられないとしたら皮肉なことです。まさに異邦人とイスラエル人との関係がそうでした。どうしてこのようなことになってしまったのか。それは「イスラエルが、信仰によってではなく、行いによって義に達せられるかのよう考えていたからです」（ローマ9:32）。彼らは信仰の力を過小評価していましたし、自分の力を過大評価していました。同じ過ちを犯してはなりません。

そしてイスラエルは「つまずきの石」につまずいたのです。イエス様はある人にとっては希望の光となりますが、またある人にとっては「つまずきの石、妨げの岩」（9:33）になるのでした。しかし、そのつまずきの石を信じるものはまったく別の世界へと導かれ、失望することが無くなるのです。